

氏 名 金 桂淵

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大甲第 1778 号

学位授与の日付 平成27年9月28日

学位授与の要件 文化科学研究科 地域文化学専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 韓国の地域社会における華僑のアイデンティティに関する民
族誌的研究
—韓国華僑のビジネスと華僑協会を中心に—

論文審査委員 主 査 教授 横山 廣子
教授 朝倉 敏夫
准教授 太田 心平
教授 林 史樹 神田外語大学
准教授 陳 天璽 早稲田大学

論文内容の要旨

Summary of thesis contents

1945年に植民地支配から解放された朝鮮半島は、1948年に南北分断を、その2年後には朝鮮戦争を経験した。こうした情勢の中、19世紀末から20世紀前半にかけて朝鮮半島に移住してきた中国人たちは本国に帰ることができず、そのまま「韓国華僑」となる。彼らは、韓国政府と国交が結ばれていた台湾の中華民国籍を取得し、中華民国を祖国として認識せざるを得ない状況におかれた。しかし1980年代末に冷戦体制は崩壊し、韓国は中国とも国交を結ぶことになる。こうした東北アジアの政治状況の変化は、彼らのアイデンティティに大きな影響を与えた。

本論文は、彼らの組織する華僑協会の役員たちを中心に「韓国華僑」というアイデンティティがダイナミックに形成されている現状やそのメカニズムを、彼らの日常的ビジネス、及び華僑協会をめぐる葛藤の民族誌的記述を通して明らかにするものである。

本論文は、全6章から構成されている。序論では、海外華僑に関する先行研究が、移民者を中国文化に影響されるだけで、移住先では孤立した存在として捉えた研究から、移住先へ現地化していく過程を捉えた研究へと変化しつつあることを指摘した。ただ近年の研究においても韓国華僑は、韓国社会の制度的問題の故、差別的な地位におかれてしまったか、あるいは台湾と韓国という国民国家の成立過程で生まれたディアスポラの状況の中におかれた、受動的な存在として描かれた。これを踏まえて本論文は、彼らが自らをどのように定義し、彼らがいかに韓国華僑アイデンティティについて議論しているかを明らかにすることにした。

第1章の前半では、本論文の調査地である大邱広域市を中心に、韓国華僑の定着過程をエスニック・ビジネスの変遷から捉え、さらにそれを韓国の社会変動の中に位置づけた。そして後半では、華僑と韓国人の間の相互認識について記述した。韓国華僑は、中国人という国家的アイデンティティが付与されているにも関わらず、それから抜けだそうとしている。むしろ自分たちが置かれた現実をディアスポラの状況として認識することから、韓国華僑としてのアイデンティティは生み出されていた。

第2章では、韓国華僑人口の半分以上が従事する飲食業（中国料理店）と、エリートの専門職である医療業（韓医業）という二つのビジネスに注目し、彼らが起業した背景、事業の運営、職場での日常生活を検討した。それを通して韓国華僑アイデンティティがどのように解釈され、形成され、発信されているのかを考察した。飲食業は、その定着初期から、中国という出身地の文化を強調し、それを自らのアイデンティティとして発信することで利益を得る、循環的構造によって維持されてきた。他方、韓医業と洋医業に分けられる医療業では、エスニック・アイデンティティの表象は弱化しつつある。韓医業においては、中国の医学を示す「漢医」から韓国の医学の成長による「韓医」への変化に伴い、中国との関連性は、専門性の承認として中国や台湾への留学経験が履歴として書かれる程度に留まるようになった。洋医業においては、華僑アイデンティティを発信する必要がさらになくなり、彼らの起業や事業運営には華僑よりも韓国人とのネットワークが活用されることが明らかになった。

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

第 3 章では、華僑協会という組織の特徴と変化について考察した。経済的に成功した華僑たちは、華僑協会役員が無賃金の職であるにも関わらずその資格を獲得し、活躍しようとする。華僑協会は、その意志が発現される場である。同時に華僑協会は、日常的には異なるレベルでエスニック・アイデンティティを駆使する飲食業者とエリート医療業者の両方が、同様の華僑アイデンティティを享有する場にもなっている。このような特徴を持つ華僑協会は近年、移民の世代交代、華僑の現地化、華僑協会の運営経費調達の困難さなどにより、移民者の親睦団体としての性格が弱まっている。ただ、華僑協会は民間団体であるにもかかわらず、華僑と台湾・韓国・中国をつなぐ連絡窓口になっており、さらには戸籍の管理と戸籍謄本の発行も行っている。このような行政的性格は維持・強化される傾向にあった。華僑協会はこうした疑似行政機関的性格を持っているため、台湾・韓国・中国との間でバランスを上手に取ろうとする傾向が強まり、ディアスポラ的アイデンティティを自発的に生み出す装置にもなっていることがわかった。

第 4 章では、華僑協会における二つの派閥の在り方とその対立に着目した。華僑協会の二つの派閥は、リーダーや構成員の職業を中心に区分される。小規模の中華料理店と食品流通業に従事している人びとからなっている派閥と、医療業者や大規模の中華料理店を運営している人びとによる派閥がそれである。前者は後者を「ヤンボッゼンイ（スーツ派）」と呼び、後者は前者を小規模の中華料理店では、バイクを利用して出前を行っているため、「オートバイ（バイク派）」と呼ぶ。

スーツ派とバイク派という二つの勢力間の葛藤は、華僑協会が主催する文化祭、親中国系団体の発足、蒋介石の銅像の改修という事件の中で現れ、深まっていった。バイク派は、戦略的に脱冷戦以後の新華僑を引き寄せて「中国人」を代表する華僑アイデンティティを主張する一方、スーツ派は蒋介石の銅像をとりあげ、台湾を象徴することによって自分らの独自性を強調した。本章では、これらの派閥間の葛藤を考察することで、移民の世代交代、移住先での職業の階層格差などによって地域社会に向けて発信するアイデンティティが異なっていること、さらにはアイデンティティをめぐる議論が現在進行形であることを指摘した。

終章では、本論文を通して明らかになった以下の 3 点を提示した。

一つ目に、韓国・中国・台湾という国民国家の登場と世界的冷戦体制が原因となって、韓国に移住してきた華僑たちは社会的に曖昧な立場におかれた。そのため、彼らは日常においてアイデンティティを戦略的に選択するようになった。

二つ目に、韓国華僑が華僑協会に注目する理由は、華僑協会が疑似的行政機関であるからだけでなく、アイデンティティの形成と発信の場にもなっているからである。

三つ目に、華僑協会役員間の派閥による葛藤は、世代や職業という立場の差異によって生まれている。この葛藤こそが韓国華僑のアイデンティティのダイナミズムを形成しているのである。

以上のように、本論文は華僑のビジネスと協会をめぐる様相を中心に、韓国の地域社会における華僑アイデンティティの形成と、変化のメカニズムを明らかにした。

博士論文の審査結果の要旨

Summary of the results of the doctoral thesis screening

本論文は、1882年に清・朝鮮間で商民水陸貿易章程が締結されてから1949年までの間に中国から朝鮮半島に移住し、現在、韓国内に居住して「韓国華僑」と呼ばれる人々に関して、韓国第三の都市、大邱（テグ）におけるフィールドワークに基づき、彼らのアイデンティティがいかに構築されているかを人々の行動の内面にまで入り込んで実証的に論じた研究である。彼らのビジネスや華僑協会の活動を、関係者へのインタビューと参与観察などから得たデータによって民族誌的に記述し、個人個人の言説を、そのおかれた立場や条件を考慮しつつ分析し、協会をめぐって展開する政治のありようを描き出した。その上で、居住する韓国、戸籍のある台湾、故地である中国大陸部の3箇所のはざままで揺れ動く彼らのアイデンティティに、階層性を始めとする分化が見られることを指摘している。

論文は、大邱の韓国華僑の過去と現状を論述する第1章から第4章までを序論と終論とはさむ、全6章で構成される。

序論では華僑・華人およびエスニシティに関する先行研究の検討を行い、アイデンティティの構築と表出の分析において、個人の能動性・主体性に着目する本研究の視座が明示される。

続く第1章は、韓国華僑の移住史と彼らの韓国での生活に影響を与えてきた国家制度の変遷を追いつつ、韓国華僑の語りを通して、彼らが集団的に共有する歴史認識を分析し、それが彼らのアイデンティティ構築の素地となっていることを明らかにする。

第2章は、生業自体のなかにエスニシティとの関係を見出すことが可能な飲食業と漢方医療業（1986年以降、韓国においては韓医業）を「エスニック・ビジネス」としてとらえ、それらのビジネス従事者の職業選択、ネットワーク形成のプロセスを明らかにし、個人個人の職業において、エスニシティがどのように活用され、表出されているかを考察する。韓国華僑に特に多い業種である飲食業者において、エスニック・アイデンティティの活用や強調が見られるのに対して、後者では、呼称が公式的に「漢医」から「韓医」に変更されて以降、中国との関連性の表出は非常に限定的になっていることが示される。

第3章は華僑協会の機能と変化を論じる。近年、互助と親睦の団体としての必要性が低下する一方、従来から特徴的であった、戸籍や渡航手続きの事務を提供する疑似行政機関的性格が強化される傾向にあり、韓国・台湾・中国との間でバランスをとる協会のあり方自体が、韓国華僑個人のアイデンティティの様態に大きな影響を及ぼす装置になっていると指摘する。

第4章は、華僑協会内部の派閥の構造を「バイク派」と「スーツ派」の対立として捉え、韓国・台湾・中国との関係の中で展開する派閥力学として描写する。それを通して見られる個々の華僑のアイデンティティの表出が、世代や職業的階層格差によって分化し、現在も変動を続けていると考察する。

論文を総括する終章では、1) 韓国華僑は歴史と国家・地域間をめぐる現状認識に基づき、アイデンティティを個々に戦略的に選択している、2) それゆえ、韓国華僑のアイデンティティの表出は多様であり、華僑協会は、華僑のアイデンティティの形成と発信の場としての役割を果たす、3) 華僑協会内の派閥対立は、世代や職業階層の違いと結びつき、アイデンティティの分化や変化のダイナミズムを形成している、と結論づける。

本論文は、次の諸点において学術的価値を有する。

1) 従来の韓国華僑に関する研究は、その法制度や人権問題を論じるものが多く、エスニシティに関する研究にしても、歴史の流れや文化伝統との関係において集団としての特

(別紙様式 3)

(Separate Form 3)

徴を指摘するに留まっていた。本研究は大邱における華僑のアイデンティティの構築について、詳細な民族誌的データに基づいて議論し、バイク派とスーツ派の類型化を援用しながら、韓国・台湾・中国のはざまで揺らぐ彼らのアイデンティティを、年代や職業的階層によって分化する、多様なアイデンティティの動態モデルとして提示した点に独創性が認められる。

2) 調査においては、華僑協会の内部や個人の経済活動の現場にまで入り込み、生活の中で発せられた個々人の肉声をすくい上げることに成功している。さらに、多数の個人の語りを的確に配置することにより、華僑自身の視点を反映し、彼らの社会活動を多面的に記述した。それによって、学歴、職業や韓国社会における彼らの社会的地位とそのネットワークによって分化するアイデンティティの様態が具体的かつ生き生きと描出された、韓国華僑に関する貴重な民族誌となっている。

3) ミクロな調査から得られたデータに基づく実証的な考察とともに、韓国華僑の歴史、法制度上の変化、アメリカなどへの再移民や新華僑との関係など、現在、韓国華僑を研究する上で必要な観点を全般的に目配りした、手堅い研究と言える。

4) 人類学における移民あるいは華僑研究の流れのなかで、当事者が能動的かつ主体的にいかに関与しているかを、現地社会の文脈の中で詳細に論じた研究事例として貢献している。同時に、韓国華僑を描くことを通じて、韓国社会の諸側面をも照射した研究でもある。

他方、本論文には若干の問題点も残っている。大邱在住の華僑の考察を通して論述された「韓国華僑のアイデンティティ」は、韓国内の他の地域の華僑や海外各地の華僑との比較を綿密に行うことによって、さらに精緻に議論する必要がある。また、本論文では、儀礼活動や教育、女性の活動については、詳細に論じられていないが、大邱における華僑のアイデンティティを一層深く考察するには、これらの領域を含めて議論することが有効である。しかしながら、これらの問題点は、今後、研究をより発展させていく際の課題とすべきであり、本論文の学術的意義と貴重な資料的価値を損なうものではない。

以上のように、韓国華僑の内部で分化した多様なアイデンティティの様相を、さまざまな社会的・経済的・政治的脈絡において考察した本論文は、従前の研究にはなかった学術的意義を有しており、博士の学位を授与するに値すると、審査員は全員一致で判断した。